

平成21年6月5日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18790358
 研究課題名（和文） 薬剤師の倫理観に基づくコミュニケーション資質向上のための研究
 研究課題名（英文） Study for communication quality improvement based on the sense of ethics of the pharmacist
 研究代表者
 川村 和美（KAWAMURA KAZUMI）
 名城大学・薬学部・非常勤講師
 研究者番号：10424946

研究成果の概要：

さまざまな職場に勤務する薬剤師が、一定水準以上の倫理的な判断ができるよう、薬剤師向けケース・アプローチの構築を目指してきた。本研究において、臨床に勤務する薬剤師や薬学生が、いつ出遭うともわからない具体的かつリアリティに富んだケースを15例作成すると共に、「5分割表」という倫理検討シートを開発して、薬剤師・薬学生に対する職業倫理を試行した。これらの成果は『薬剤師のモラルディレンマ』として書籍化、近刊の予定である。さらに、自らが正しいと判断したことを、他者に齟齬なく伝えられるだけのコミュニケーション力を養成するために、『薬剤師の倫理・コミュニケーション（仮題）』が発刊の見通しである。本書は、患者と薬剤師、医師と薬剤師のやり取りを描いたシナリオをベースとしており、どんな職場の薬剤師であっても周囲の仲間とすぐに取り組めるようなスタイルで執筆している。これらの書籍や薬業界における倫理・コミュニケーション教育のツールとして活用されるものと期待される。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	900,000	0	900,000
2007年度	1,100,000	0	1,100,000
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：薬学、人文学、人間学、倫理学

科研費の分科・細目：境界医学、医療社会学

キーワード：倫理、コミュニケーション、薬学、教育、モラルディレンマ、プロフェッショナルリズム

1. 研究開始当初の背景

- (1) 薬学教育年限延長に伴い、倫理・コミュニケーションの重要性が指摘されている一方、倫理が必ずしもコミュニケーションと併せて考えられてはならず、薬剤師が図るコミュニケーションの根底に倫理観が息づいているという状況になかった。
- (2) 薬剤師の倫理に関する研究が乏しく、有

効な教育手法も見い出されていないことから、現場の薬剤師の倫理的感性は野放しの状態である。しかし、生命関連性の極めて高い医薬品をもって国民を支援する薬剤師の言葉や態度は、国民の健康に多大な影響力をもつことから、薬剤師の倫理観に基づくコミュニケーション力の資質向上が急務であると思われた。

(3) そこで、薬剤師の対人援助における倫理的な態度・姿勢を、人間学・ケア論などから、わかりやすく導くと同時に、他医療職種のエドゥカシヨナル事例を参考にすることで、薬学における倫理・コミュニケーションのあり方を探求し、医薬品供給の先に患者の生命を考えられる薬剤師の養成を目指して、実務教育に反映させたいと考えた。

2. 研究の目的

- (1) 薬剤師の業務を網羅する倫理領域（医療倫理、環境倫理、経営倫理など）から、薬剤師がモラルディレンマを解決できるような教育手法を導き出す。
- (2) 薬学生及び薬剤師の教育・研修のための倫理・コミュニケーションのトレーニング書を刊行する。
- (3) これらのツールを用いた薬剤師の職業倫理教育を展開する。

3. 研究の方法

- (1) 薬剤師に対する調査を実施して、倫理教育の現状を把握するとともに、薬剤師の職業に対する職業意識を分析して、薬剤師のプロフェッショナリズムと求められる倫理教育の範疇を明確化した。
- (2) 薬剤師の倫理的・法的・制度的問題を洗い出すため、海外の倫理教育を視察したり、研究会等に参加するなどして、専門分野における資料を収集し、倫理学者との対話を繰り返して、薬剤師が現場で直面するモラルディレンマの検討を進めた。
- (3) 倫理についてケースを、コミュニケーションについてシナリオを執筆し、これを用いて薬学部授業や薬剤師の研修で試行した。これらは、いずれも書籍として近刊の予定である。

4. 研究成果

(1) 倫理とコミュニケーションの関係性の模索

薬剤師が直面する課題について、倫理学者や社会学者から専門知識の提供を受け、理論を深めた。欧米で医療従事者を対象に展開されている医療人文学教育プログラム

(Medical Humanities Education

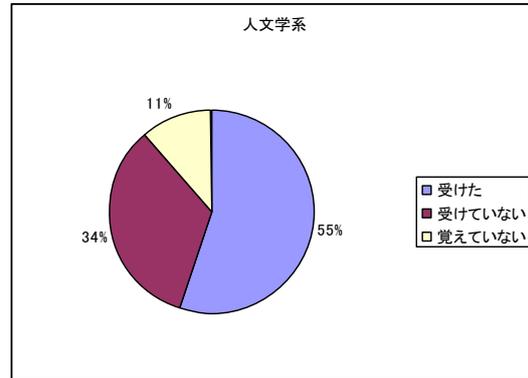
Program) に着目し、国際シンポジウム（アメリカ、Drew University）に参加して、本プログラムが臨床の現場で医療従事者を対象として、どのように実践されているか等の視察を行なった。医療科学研究所の医療経済研究会に継続出席し、現在の医療制度の認識を深めた。韓国、インド、イギリスの薬剤師倫理規定を入手し、翻訳に取り組んで、諸外国の職務規範から薬剤師に求められる倫理規範を検討した。医療倫理や臨床倫理といった医学教育関連の研修会や、多職種参加のワ

ークショップに積極的に参加して臨床倫理の諸問題を解決するトレーニングを積み、薬剤師の倫理・コミュニケーション教育を模索した。

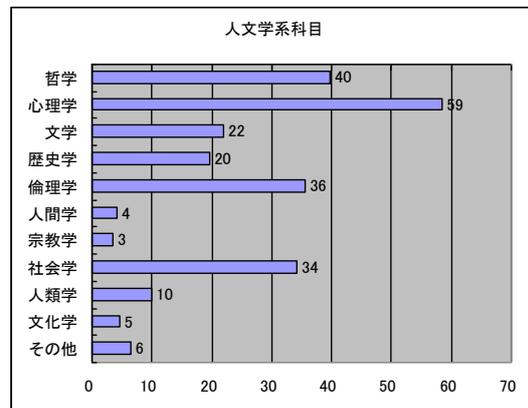
(2) 職業に関する意識調査

薬剤師及び薬学生、看護学生の職業意識ならびに倫理教育の受講現況を把握するために、各種薬学会の会場や薬科大学・看護大学で薬剤師・学生の職業意識に関する調査を行った。社会学的手法（量的）を用いて分析し、薬剤師の倫理観とプロフェッショナリズムの関係を明確化し、調査結果はさまざまな学会の場を通じて公表してきた。

- ・調査期間：2007年9月～08年12月
- ・調査対象：日本社会薬学会、日本医療薬学会、日本薬学会の会員、薬学生、看護学生



人文学系科目受講の有無について尋ねたところ、受けたことがあると答えた人は55%であり、受けたことが無いと答えた人は34%であり、中でも心理学の受講が圧倒的多数であ



った。

職業アスピレーションに関して、薬剤師は「自分の能力を発揮できることや興味のある仕事であること」を重視し、「患者・顧客と直に接せられること」や「仕事内容が楽なこと」は重視していない傾向にある。薬学生は「収入が多い」「仕事内容が楽」を重視しており、看護学生は「患者・顧客と直に接せられること」や「教育内容が充実していること」を重視していることがわかった。

(3) 薬剤師の倫理観向上のための取り組み

医学教育を担当している医師とのシンプ

ジウムや合同勉強会、各種学会でワークショップを企画・開催するなどして、医師やコ・メディカル、患者とのディスカッションを通じて、薬剤師の取り組み易い倫理教育方法を考究した。薬剤師の倫理観およびコミュニケーション力を高めるための教育法の必要性を感じ、現場で遭遇しうるモラルディレンマを含むケースを15例作成して、社会学、人間学、人類学などの人文的アプローチから論じた。これらは主に実務者の購読する雑誌『薬局』（南山堂、2008年1月号-2009年6月号）へすでに先行的に公表してきたが、本連載は大きな反響を呼び、いくつかの薬学部の授業ですでに教材として採用されている。

さらに、ケース検討法の新たなツールとして5分割表を開発し、理論化を試みた。以上のような内容を、理論編とケース検討編から成る『薬剤師のモラルディレンマ』にまとめ、まもなく刊行予定である。『薬剤師のモラルディレンマ』は、いま求められている薬剤師の倫理教育プログラムを具体的に提示するものと期待されている。

これらの教育手法を日本社会薬学会のワークショップにおいて、薬学部教員や臨床で活躍する薬剤師を対象に行い、薬剤師の倫理教育に関する問題を日本医療薬学会や日本薬学会の大会シンポジウムで提起した。最終的には、薬学雑誌に論文を投稿して、査読を経て掲載された。

(4) 薬剤師のコミュニケーション力養成のための取り組み

自らが正しいと判断したことを、他者に齟齬なく伝えられるために、また人と人との関係性をよりよく構築するために、倫理観に基づいたコミュニケーション力を養成する必要がある。

患者と薬剤師、医師と薬剤師のやり取りを描いたシナリオを多数掲載した『薬剤師の倫理・コミュニケーション（仮題）』が発刊の見通しである。本書は、トレーニング形式で執筆しており、どんな職場の薬剤師であっても周囲の仲間とすぐに取り組める。さらに、新潟病院に訪問してから、他者との関係性から構築するQOL概念とコミュニケーションについて、引き続きの研究を進める。以上、薬剤師の倫理観に基づくコミュニケーション教育の実践的学習プログラムを提示した。

※研究成果を下記国際学会等で発表した。

第66回国際薬学連合(FIP)学会

第67回国際薬学連合(FIP)学会

第68回国際薬学連合(FIP)学会

第21回アジア薬剤師会連合学術大会(FAPA)など

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計19件)

①川村 和美、薬剤師のモラルディレンマ—ケース検討から学ぶ倫理的問題の対処法—、薬学雑誌(日本薬学会)、vol.129 No.7、2009年近刊、有

②川村 和美、松田 純、薬剤師のモラルディレンマ 第15回 実験で動物を殺めるとき、薬局、Vol60、No.7、p.128-134、2009年、無

③川村 和美、松田 純、薬剤師のモラルディレンマ 第14回 薬剤師の研究発表、薬局、Vol60、No.4、p.172-176、2009年、無

④川村 和美、松田 純、薬剤師のモラルディレンマ 第13回 遺伝子解析に基づいて薬が処方される時代、薬局、Vol60、No.3、p.152-157、2009年、無

⑤川村 和美、松田 純、薬剤師のモラルディレンマ 第12回 薬剤師の情報提供によって患者が中絶を決めたとき、薬局、Vol60、No.2、p.142-146、2009年、無

⑥川村 和美、松田 純、薬剤師のモラルディレンマ 特別企画 医師・薬剤師・患者のすれ違い —なぜお互いにわかり合えないのか—、薬局、Vol60、No.1、p.51-57、2009年、無

⑦川村 和美、松田 純、薬剤師のモラルディレンマ 第11回 身長を伸ばすための成長ホルモン治療を知ったとき、薬局、vol59、No.13、p.122-126、2008年、無

⑧川村 和美、松田 純、薬剤師のモラルディレンマ 第10回 介護者のための投薬に遭遇したとき、薬局、vol59、No.12、p.100-105、2008年、無

⑨川村 和美、松田 純、薬剤師のモラルディレンマ 第9回 在宅医療で未使用の薬が残ったとき、薬局、vol59、No.11、p.130-136、2008年、無

⑩川村 和美、松田 純、薬剤師のモラルディレンマ 第8回 患者に無断で行なわれている臨床研究に気づいたとき、薬局、vol59、No.10、p.140-143、2008年、無

⑪川村 和美、松田 純、薬剤師のモラルディレンマ 第7回 病院薬事委員から学会発表資料の作成を依頼されたとき、薬局、vol59、No.9、p.136-139、2008年、無

⑫川村 和美、松田 純、薬剤師のモラルディレンマ 第6回 重複投与の調剤を強いられたとき、薬局、vol59、No.8 p.146-149、2008年、無

⑬川村 和美、松田 純、薬剤師のモラルディレンマ 第5回 患者が自己判断で内服量を変更するとき、薬局、vol59、No.7、p.166-169、2008年、無

- ⑭川村 和美、松田 純、薬剤師のモラルディレンマ 第4回 患者の意向による服薬拒否、薬局、vol59、No.5、p.2290-2293、2008年、無
- ⑮川村 和美、松田 純、薬剤師のモラルディレンマ 第3回 処方されている薬がなかったとき、薬局、vol59、No.3、p.466-469、2008年
- ⑯川村 和美、松田 純、薬剤師のモラルディレンマ 第2回 大量の残薬が発覚したとき、薬局、vol59、No.2、p.286-289、2008年、無
- ⑰川村 和美、松田 純、薬剤師のモラルディレンマ 第1回 調剤過誤を発見したとき、薬局、vol59、No.1、p.110-113、2008年、無
- ⑱川村 和美、私の薬剤師倫理、月刊薬事、vol49、No.11、p.161-164、2007年、有、日本薬学会医療薬科学部会公募論文、優秀賞
- ⑲川村 郁人、川村 和美、奥田 潤、FIP 倫理規定(2001)の翻訳、社会薬学、vol25、No. 1、p.28-46、2006年、有

[学会発表] (計26件)

- ①川村 和美、薬学生に対する実践型倫理教育の有効性の検証、日本薬学会第129年会、2009年3月27日、国立京都国際会館
- ②川村 和美、看護学生の職業意識に関する調査、第41回東海薬剤師学術大会、2008年12月7日、あいち健康プラザ
- ③川村 和美、薬学生の職業意識に関する調査、第41回東海薬剤師学術大会、2008年12月7日、あいち健康プラザ
- ④川村 和美、薬剤師の社会的位置づけの変化と職業倫理教育への取り組み、第20回日本生命倫理学会、2008年11月30日、九州大学
- ⑤川村 和美 (シンポジスト)、シンポジウム『薬学と倫理』「薬剤師の役割変化に伴う倫理教育の必要性」第27回日本医学哲学・倫理学会、2008年10月25日、北海道大学
- ⑥川村 和美 (オーガナイザー)、シンポジウム『在宅医療における現状と問題点』、第2回日本緩和医療薬学会、2008年10月19日、パシフィコ横浜
- ⑦川村 和美、がん性疼痛に対する薬剤師の認識 ～医療用麻薬とがん性疼痛～、第2回日本緩和医療薬学会、2008年10月18日、パシフィコ横浜
- ⑧川村 和美、新入社員のタイプ分析とオーダーメイド教育への展望 ～薬剤師資質の保証を目指して～、第41回日本薬剤師学術大会、2008年10月12日、宮崎フェニックス・シーガイア・リゾート
- ⑨川村 和美 (ファシリテーター)、医師と薬剤師の連携力向上セミナー～お互いにわかりあうために～、西尾幡豆プライマリケア

ネットワーク (PCNN) 第3回勉強会、2008年9月27日、宮崎医院

- ⑩川村 和美 (オーガナイザー)、シンポジウム『薬剤師に必要な倫理観を養うには何かが必要か』、第18回日本医療薬学会年会、2008年9月20日、産業振興センター
- ⑪川村 和美 (ファシリテーター)、ワークショップ『倫理的問題の検討法 ～臨床上のモラルディレンマに挑む～』、日本社会薬学会第27年会、2008年9月6日、昭和大学
- ⑫Kazumi Kawamura、Pharmacist's professionalism and specialty in Japan、第68回国際薬学連合(FIP)学会、2008年9月2日、Basel Convention Center
- ⑬川村 和美 (オーガナイザー兼シンポジスト)、シンポジウム『薬剤師のモラルディレンマと倫理教育の重要性』、日本薬学会第128年会、2008年3月28日、はまぎんホール
- ⑭川村 和美 (オーガナイザー)、シンポジウム『がん疼痛治療におけるコミュニケーション能力』、第1回日本緩和医療薬学会、2007年10月20日、星薬科大学
- ⑮川村 和美 (シンポジスト)、シンポジウム『一般用医薬品販売制度の改正に対する薬剤師教育の対応』、第4回日本セルフメディケーション学会、2007年10月13日、日本大学薬学部
- ⑯川村 和美 (シンポジスト)、シンポジウム『薬剤師倫理・リベラルアーツの重要性』、第17回日本医療薬学会年会、2007年9月30日、前橋テルサ
- ⑰川村 和美、薬剤師志望の有無から見た新入社員の職業志向性 (SP賞受賞)、日本社会薬学会第26年会、2007年9月17日、東京理科大学
- ⑱Kazumi Kawamura、The proposition in pharmacist's education about ethics and communication ～Importance of humanities subject education for medical stuffs～、第67回国際薬学連合(FIP)学会、2007年9月2日、Jiuhua Spa & Resort
- ⑲Kazumi Kawamura、PRACTICAL USE OF A DSRC SHEET～RISK MANAGEMENT OF THE SIDE EFFECTS EVASION BY THE PHARMACIST～、第21回アジア薬剤師会連合学術大会、2006年11月21日、パシフィコ横浜
- ⑳川村 和美 (シンポジスト)、シンポジウム、『コミュニケーション研修の成果測定』、第5回ファーマシューティカルコミュニケーション研究会年会、2006年11月3日、北海道大学
- ㉑川村 和美、薬剤師はセルフメディケーションの相談役たりうるか?～薬剤師のイメージ調査～、第4回日本セルフメディケーション学会、2006年10月21日、日本大学

㉒川村 和美、等級制セミナー初級コミュニケーションにおける実技実習の効果測定、第39回日本薬剤師会学術大会、2006年10月9日、広島国際会議場

㉓川村 和美、調剤併設型ドラッグストアの薬剤師倫理規定に関する新入社員の意識調査と年次的比較分析、第16回日本医療薬学会年会、2006年9月30日、金沢市観光会館

㉔ DSRC シートの作成 ～薬剤師による高齢者の QOL 向上をめざして～、日本社会薬学会第25年会、2006年9月15日、徳島文理大学

㉕ Kazumi Kawamura、Establishment of Sugi Pharmacy's Code of Ethics for Pharmacists、 and an Opinion Poll of Members ～About the importance of the ethics view which a pharmacist is conscious of～第66回国際薬学連合(FIP)学会、2006年8月28日、

〔図書〕(計7件)

①川村 和美、南山堂、薬剤師の倫理・コミュニケーション、2009年発刊決定

②川村 和美、松田 純、南山堂、薬剤師のモラルディレンマ、共著、2009年発刊決定

③川村 和美、知泉書館、ケースブック 心理臨床の倫理と法 共著、薬学レクチャー1：「死の病」から慢性疾患へ—抗 HIV 薬の開発、薬学レクチャー2：ドラッグについて、2009年

④川村 和美、奥田 潤、じほう、薬剤師とくすり倫理 改訂7版、2007年、288p

⑤川村 和美、南江堂、社会薬学 2刷 共著、2007年、292p

⑥川村 和美、廣川書店、臨床薬学マニュアル 2刷 共著、2007年、369p

⑦川村 和美、エルゼビア・ジャパン、薬学入門—薬剤師の新しい価値創造— 共著、2007年、214p

6. 研究組織

(1)研究代表者：

川村 和美 (Kazumi Kawamura)

名城大学・薬学部・非常勤講師

研究者番号：10424946

